様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００３３６

研究課題名（和文）伝統工芸と先端技術による複製古典籍を活用した書誌学研究と書物文化の世界への発信

研究課題名（英文）Bibliographic research and dissemination of book culture to the world using reproductions of classic books made with traditional crafts and cutting-edge technology

研究代表者
小林　一彦（KOBAYASHI, Kazuhiko）

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：３０２６９５６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　日本の書物は料紙・形状・装丁に至るまで多種多様である。書物がそれぞれの役割を担い、日本文化の保存と伝播・流布に多大な貢献をしてきたことの証左である。もとの書物を書き写し、新たな転写本として継承することの繰り返しで、日本は長らく文化をつないできた。このような書物を研究することで、古典文学作品の原初の形態や受容・流布の有り様などが明らかになると考える。そのモデルケースとして鴨長明の『方丈記』『無名抄』、寂蓮法師の和歌作品などの複製古典籍を自作し書誌学的な見地から分析、それが文献学の有効な研究方法となることを、論文や研究発表またYouTube動画などを用いて例示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本文化の諸事象は本物からの「写し」によって保存・継承がなされ、流布してきた。そこには伝統産業に携わる職人の手わざが少なからず影響している。書物に欠かせない和紙も墨も材料は植物で、すぐれた技術によって加工され、日本文化のＤＮＡを文字情報として後世へと伝え、現代でもなお文書蔵の中で千年を超えて生命を保っている。貴重な文化財を自由に触ることは難しいが、複製古典籍なら問題はない。職人の手わざや先端技術により創られた質の高い複製品を用いて、次世代が文化を継承したり、また世界に向けた発信を行うことも可能である。「写し」の価値、複製の活用を、専門家から子どもたちに至るまで幅広い層に向けて提言を行った。

研究成果の概要（英文）：Japanese books are diverse in terms of paper, shape, and binding. Each book plays a different role, proving that it has made a great contribution to the preservation, propagation, and dissemination of Japanese culture. For a long time, Japan has inherited culture by repeatedly copying the original book and passing it on as a new book. By studying such books, we believe that the original form, reception, and dissemination of classical literature will become clear. As a typical example, we have created facsimiles of classical books such as Kamo no Chomei's "Hojoki" and "Mumyosho" and Jakuren Hoshi's "Wakashu" and analyzed them from a bibliographical perspective. We have presented concrete papers, research presentations, YouTube videos, etc. to show that analyzing these facsimiles from a bibliographical perspective is an effective research method in philology.

研究分野：書誌学情報をもとにした日本古典文学の研究

キーワード：「写し」の文化　伝統工芸　職人の手わざ　最先端技術　複製古典籍・古文書　産学連携　書物文化　次世代への継承

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）書物を対象とする学問の諸問題

文献学の基底をなす、書物・媒体にかかわる研究は、それ自体、すでに早くからそれぞれの国や地域で実施されてきた歴史がある。パピルス学、コデックス（冊子写本）学など、媒体ごとに写本研究が行われ、同じパピルス学でもエジプトとヨーロッパではさまざまな相違が存在する。書物さらに広義の文化資源媒体研究は、共通の研究目的や方法論を見出すのが難しい状態下にあり、まして世界レベルの標準化においては、いまだ模索の段階にあった。千差万別の＜モノとしての書物＞を対象とする、世界共通の統一した研究手法など、はたして成立し得るのか、という根本的な問題が、そこには横たわっていた。

（2）日本の研究動向

2010 年代の後半、日本文学研究の分野で「文化資源としての書物（古典籍・古文書）を直接の対象とした研究への気運が高まってきた。研究代表者（小林、以下「代表者」）もディスカッサントとして参画した、人間文化研究機構国文学研究資料館の「国際共同研究ネットワーク構築計画」第 1 回日本語の歴史的典籍国際研究集会「総合書物学への挑戦」（2015）、また明星大学日本文化学科国際シンポジウム「世界の写本 日本の写本」（2017）などは、そうした特筆すべき事例として注目された。こうした特徴的な研究動向を、代表者は『リポート笠間 62 号　特集＜いま全力で取り組むべきことは何か＞』（2017）において紹介した。

このような国際的な比較研究、異文化横断的な視点から日本の書物を研究しようという姿勢と平行するように、九州大学創立百周年記念講演会での中野三敏「和本リテラシーの回復を願って」（2011）を契機として、日本の古典籍に載せられた文字情報を正しく読解できる能力を若者たちに身につけさせようとする「和本リテラシー」の運動が起こった。日本近世文学会を中心に、くずし字を簡単に読めるようにする試みやアプリの開発、書道と連携し中高生を対象とした出前授業なども試みられた（日本近世文学会編『和本リテラシーニューズ』vol.1～5、2015～2020 参照）。

（3）伝統工芸を利用した最先端技術による古典籍・古文書の複製事業

2014 年、富士ゼロックス京都文化推進室（現在の富士フイルムビジネスイノベーションジャパン京都支社ＭＳ部文化推進京都工房）が社会貢献をかかげ、無償（現在は実費等負担）で古典籍・古文書複製事業を行っていることを知った。所蔵者からの複製依頼を受けて、原本を綿密に調査し、紙を漉くところからはじめ、同種の綴じ糸を発注し、表紙の金襴も注文する、まず京都の地の利を活かして、伝統産業に携わる職人の技で本体部分製作される。その上で、和紙をコピー機に通してトナーを付着させ、濃淡やかすれ具合まで再現作業を行う。雲英引きは特殊なホワイトトナーを使用すると聞き、その徹底ぶりに舌を巻いた。出来上がった古典籍・古文書は、世界に一点しか存在しないコピー、写本とも版本とも違う、独特の複製本である。虫穴などは線香であけ、紙の疲れ具合、糸の綴じ具合、表紙の破れ加減、そして重さまで、どう見ても本物にしか見えない。こうしで製作された複製古文書・古典籍の数々は、モノとしての文化資源の宝庫であり、これを使って、新しい書誌学研究や「和本リテラシー」教育ができないかと思い至った。

２．研究の目的

（1）新しい書誌学研究の構築をめざす

「必要は発明の母」というが、そもそも書物という＜モノ＞は、書かれるべき文字情報・テキストに相応しい、使用に耐えうる、保存に適している、あるいは材料が手に入りやすい、などの各要素についてそれぞれ優先順位を付け、必要に応じて、書物としての形態が選択されているはずである。そのような前提に鑑み、日本の書物について、構造から明らかにし、なぜそのような形態を取るのか、書誌学的な視点から、書写情報としての日本文学を考察してみることは意味がある。そして何よりも＜モノとしての書物＞の価値を正面から考察することを主目的とする。文化資源そのものである＜モノとしての書物＞を直視することで、書物の成り立ちを探る新しい書誌学研究の構築をめざすのである。

（2）伝統工芸と最新技術との融合から新知見を導く

富士フイルムビジネスイノベーションジャパン京都支社ＭＳ部文化推進京都工房（以下「文化推進京都工房」）の製作する、古くからの伝統の技と企業の最先端の複写技術と、その両方の良いところを融合した、ユニークな複製古典籍・古文書を有効活用する研究である。製作にあたった複数の専門家から、新知見が導き出される可能性を秘めている。京都の地の利を活かし、地域に根ざした伝統産業の職人の手わざ（料紙・綴じ糸・軸・金襴・表装など）に、世界的な企業の先端技術（光学や各種トナーなど）が結びつき、複製古典籍を制作する過程で、いわばその現場でなければわからない別次元の書誌情報を、聞き取り調査を駆使しつつ、＜モノとしての書物＞を解析する新しい視点の書誌学研究を試みる。

（3）次世代に向けた新しい「和本リテラシー」の方法論の構築
古典籍は、さまざまな色・形状・形態をもち、バラエティーに富み、それ自体が、モノとして人の好奇心を惹きつける魅力を持っている。日本語・日本文学の文字情報を載せている複製古典籍は、くずし字の読めない子供たちにも、日本人のＤＮＡとでもいうべき文化情報が書き込まれた、いわば乗り物としての生命体である＜書物＞は、それだけで十分に興味深い存在である。小学校から大学・大学院まで、出張授業を行いながら、次世代の若い人々に、日本文化について関心を持ってもらうツールの開発、また方法論の構築などにも、当該研究は成果が期待される。デジタル空間の画像のように見た目だけではなく、重量や質感も本物に近い複製物を用いた和本（古典籍・古文書）の教材教育を試み、その方法について有効な提言を行う。

（4）日本の書物文化の世界への発信
海外の専門研究者に、日本文化について紹介するための新しい機会を提供する。触感・質感・重量感までも再現した精巧な複製古典籍・古文書を手に取ることは、ガラスケース越しにしか見たことがなかった、あるいはバーチャルなデジタルデータでの画像でしか古典籍を見たことがない専門研究者にとって、刺激的な体験となろう。具体的には、実物に触れたことのない内外の専門研究者向けの、ワークショップなどでの活用が想定される。それはそのまま、文化資源としての＜モノとしての日本の書物＞の、格好の海外への発信となるに違いない。

３．研究の方法
【当初の計画】
文化推進京都工房の社会貢献事業、古典籍・古文書複製事業と連携し、書物の書誌学的な研究の深化と、書物を介した日本文化の内外への発信を行う。同工房は、和紙や綴じ糸、表紙の金襴、巻物の軸、表装などの伝統工芸分野における京都在住の職人の技能と、最先端のトナー印刷による墨筆再現印刷技術との融合により、手触りや質感、重量など原本そっくりのレプリカを製作し、所蔵者に寄贈（現在は実費等依頼者負担）している。
当該研究は、代表者・研究分担者（彬子女王殿下、以下「分担者」）がそれぞれの得意分野を生かし、連携連絡を取りながら進められる。具体的には、以下の研究を遂行することになる。
① 多様な古典籍の書誌学的な原本調査を精力的に行い、貴重な原本ならではの書誌データを収集・集積する。
② 複製本の製作過程でなければわからない、工房担当者からの書誌情報データを提供してもらうことで、職人の目で見た別ルートからの書誌情報の収集も平行して行う。
③ 精巧な複製物を用いることにより、日本の市民（特に若い世代）に実際に書物を手に取って触れてもらうことで、多様な日本独特の書物文化を理解してもらえる機会をつくる。
④ 原本を手に触れる機会がない国外の専門研究者向けに、精巧な複製本を使用して日本の書物への理解を深めてもらうワークショップなどを企画し、発信のノウハウを蓄積する。

しかしながら、想定外の出来事が発生した。新型コロナウイルスのパンデミックである。その影響は甚大で、研究方法をやむなく変更せざるを得ない事態に陥った。
【コロナ後の計画変更】
新型コロナのパンデミックにより、海外への渡航そのものが不可能となり、複製古典籍を国外搬出してのワークショップなどは夢まぼろしとなった。国内でも、人を集め対面で実施する、複製古典籍を手で触ってもらいながらの「和本リテラシー」の普及活動もできなくなった。
大学でも在宅勤務のテレワークが常態となり、古典籍原本の調査にも出向けなくなった。コロナが早期に終息することを期待しつつ、研究期間の延長を願い出て許可されたが、コロナの流行の波は何度も押し寄せ、その影響は長期間に及んだ。人流は制限され、古典籍の所蔵機関もおしなべて閲覧調査を停止した。当該研究にとって原本調査が出来ないことは致命的で、研究計画の見直しを迫られる事態となった。
けれども、コロナ下で人流が制限されたことが引き金となり、web 上でのデジタルによる画像公開はこれまで以上に進展を見せた。これを利用しない手はないと、研究を立て直した。
すなわち、精巧なデジタル情報をカラープリンターで印刷し、自らの手で私製の簡便な複製古典籍を製作し、そこから得られた新知見を、学会発表などを通じて公開する方法である。オンラインが急速に社会に浸透し、動画の配信および視聴の環境が国内外で飛躍的に整備されたことを受けて、対費用効果の観点からも（古典籍所蔵者の許諾を得て）私製の複製古典籍による動画制作を行い、成果を世界に向けて直接配信することとした。

４．研究成果
（1）古典籍リテラシーに関する成果
古典籍とその文化を次世代や一般市民にわかりやすく伝えるための研究成果として、代表者は『初中等学校における古典教育』（国文学研究資料館研究報告、2019）に「デジタル世代に和本のアナログ文化を伝える」と題し、次世代の子どもたちに伝統工芸による職人の手わざを利用した、モノ（精巧な複製物）による古典教育の必要性と可能性を提言した。
同じく、2019 年には一般市民向けに、京都学講座「京の伝統と先端―みやこが育んだ“モノ”と“技”―」に企画立案から参画し、古文書・古典籍の精巧な複製を手がける富士ゼロックス株

式会社文化推進室長（当時）と共に登壇、「手に取って触れる古文書への挑戦－京の匠の技と最先端技術との融合－」の講座（リピート２回）を実施した。原本の徹底調査により得られた歴史的背景や和紙・糸、顔料などの素材情報、また製本法をもとに、市販の複写機を改良した特別仕様機を用いて、質感・重量に至るまで忠実に再現した複製品を並べ、それを前に解説、後半は手にとって触ってもらう体験型の講座は、参加した市民にたいへん好評であった。

（2）古典籍・絵画・書跡の複製にかかわる伝統工芸と職人の技術に関する成果

分担者による『日本美のこころ　最後の職人ものがたり』（小学館、2019）が刊行された。その中には、高度な印刷複製技術である「コロタイプ」が、いかに日本の美術・書跡の精巧な複製づくりに貢献したかが、わかりやすく解説されている。分担者はかつて海外で「写し」をテーマに国際シンポジウム『Utsushi：the art of copying』（2010、ハワイ大学）を企画・監修した。「写し」は、もとより原本ではない。しかし「写し」にも美術品としての高い価値があると認められる。近時、法隆寺金堂壁画の公開につき国民のあいだで関心が高まっているが、分担者はイギリス留学時に大英博物館でアンダーソン・コレクションの整理と調査を手がけ、アーネスト・サトウが模写させた法隆寺金堂壁画の最古の模写絵画を発見した。そのような経験に裏打ちされた成果に「大英博物館に所蔵された法隆寺―金堂壁画と百済観音の複製の意義について―」（『特別展　法隆寺金堂壁画と百済観音図録』NHK・NHK プロモーション・朝日新聞社　2020）があり、東京国立博物館の展示とあわせて大いに関心を集め、さらには「大英博物館と日本美術」（旭川日英協会、2923）も、当該分野の国民への理解に寄与するもの大であった。

分担者による招待講演「伝えるもの　伝わるもの―明治から平成をつなぐ皇室文化―」（第 88 回学習院大学史料館講座「華ひらく皇室文化―明治宮廷を彩る技と美―」2019)、「皇室文化と伝統技術の継承」（からむし織体験生 30 周年記念シンポジウム、2023）なども、日本の伝統的な職人の手わざに言及したもので、聴衆から好評をもって迎えられた。

（3）古典籍の書誌学的な調査（および修理報告）にもとづいた研究の成果

冷泉家時雨亭文庫所蔵の古典籍群（重要文化財）の精巧な影印複製をもとに、代表者は「王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から」を同文庫の機関誌『しくれてい』（2018～2020）に連載した。取り上げた古典籍は「平親清四女集」「平親清五女集」「御形宣旨集」「本院侍従集」「斎宮女御集」「選子内親王集」「小馬命婦集」「小大君集」「四条宮下野集」「肥後集」「摂津集」「二条太皇太后宮大弐集」「六条院宣旨集」「後嵯峨院大納言典侍集」「阿仏尼五百首」である。

このうち「斎宮女御集」についての論考は、特に反響があった。時雨亭文庫に「斎宮女御集」は、定家監督書写本、定家筆臨模本、資経本臨模本の三本が伝わっていた。近時、資経本原本が忽然と姿を現し、世の耳目を集めたが、斎宮歴史博物館の所蔵となり、京都の岡墨光堂による修理が行われた。その報告書に角筆（尖った先端を紙などに押し当てて凹ませることで記された文字や符号）の存在が記されていたため、急遽原本調査に赴き、その結果、角筆による斜線が確かに 12 箇所にわたり存在することを、その位置とともに指摘した。冷泉家時雨亭叢書の解題には角筆の有無は記されておらず、これまで存在しないものと思われていたが、角筆の存在が確かめられたのである。これにより、角筆の存在は資経本全体に及ぶのか否か、再調査の必要が出てきた。資経本私家集は、擬定家本私家集、承空本私家集（ともに重要文化財）の親本（もとになった本）であり、この発見が、今後の私家集研究に与える影響は小さくはないと考える。

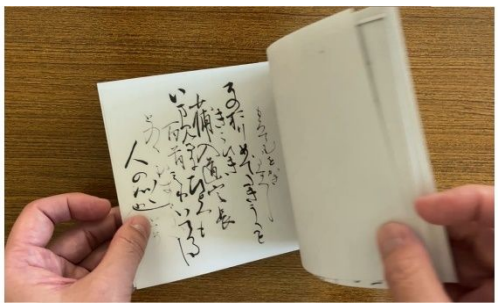
（4）私製の複製古典籍による研究の成果

コロナ下にあって、代表者は web 上のデジタル画像を印刷し、個人で研究に利用するために私製の複製古典籍を何点か製作した。そのうち『無名抄』については、最古写本の一つ梅沢本（現東京国立博物館蔵）の親本が巻子本（巻物）であった痕跡をいくつか発見し、その証明のために巻子本への改装を私的な複製により試みた。結果は、期待以上であり、やはりモノとしてのリアリティーは圧倒的で、原初の形態は巻子本であったとの確信を得た。その成果をもとに、口頭発表「鴨長明『無名抄』その原態と流布―鎌倉期和歌史のために―」（和歌文学会第 140 回関西例会、2022）を行った。『無名抄』は鎌倉時代に遡る古写本が比較的多く残っており、異本と呼ばれるような伝本は存在しない。書入により成長したり改編されたりすることの多い歌学書としてよりも、本文の内容が読み物として十分に面白く和歌説話的な随筆として受容されたからであろう。ただし、章段見出しには異同が見られ、特に冒頭部の有無の違いは特徴的で、その相違が如何にして生じたかは、原本の形態を推定することで明らかになると考えた。現存諸本には巻子本のかたちをとる古写本はないが、画像データをもとに一巻の巻子装に仕立ててみると、こうした疑問は氷解することを実証した。あわせて積極的な複製古典籍の製作を進めることで、さまざまヒントが見えてくる可能性を学会に提言した。

また、都道府県境を跨いでの移動が制限されていた時期に、代表者は勤務先からほど近い京都市内の賀茂御祖神社（下鴨神社）所蔵の『方丈記』新出伝本を閲覧調査する機会に恵まれた。コロナ下にあっては、貴重な原本調査である。その本は雲母刷りの文様をもつ巻子本であったが、もと綴葉装からの改装であることが手擦れの痕跡などの特徴から一目で看取された。写真撮影した画像データを頂き、それをもとに印刷した紙を綴じて綴葉装一帖へと複製復元した。雲母刷文様は「嵯峨本方丈記」と一致するものはなく、観世流謡本（光悦謡本）や「嵯峨本徒然草」と同じ絵柄が 4 種、確認できた。また微細に見ればごく僅かに相違する箇所も見出し得た。この新

出伝本は嵯峨本のような古活字版本ではなく、写本である点も異彩を放っていた。こうした書誌学的な情報をもとに「伝烏丸光広筆『方丈記』の出現―嵯峨本の周辺―」（『京都学問所紀要』3号　2024）を発表し、複製古典籍により復元された綴葉装の姿を料紙の雲母刷文様と共に図示した。これも、複製古典籍を自分で作ってみることが、研究上きわめて効果的であることの証左事例となった。

（5）複製古典籍を用いた動画の作成と YouTube による配信



代表者は人間文化研究機構国文学研究資料館創立 50 周年記念式典の招待講演「ほんの枕を―古典籍の『もてなし』『あひしらひ』から―」において、宮内庁書陵部蔵の寂蓮法師「少輔入道百首」について、web 画像を用いて複製古典籍を独自に製作し、ネットで動画により公開することを原本所蔵機関に申請し許可を得た。該本の現在の状態がどのような過程を経てもたらされたものなのか、それを用いて明らかにするためである。専門業者に依頼して動画を制作し、国文学研究資料館の専用 YouTube チャンネルから世界に向けて配信を行った。二括から成る綴葉装の古典籍は、表紙が一回転すると簡単に外題が本文最終丁になり、あたかも巻末識語のように見えてしまうこと、その場合は前見返しが立ちどころに後表紙となること、などを動画で実際にやって見せた。これまで「少輔入道百首」の巻末識語とされていたものが、実は外題と俊成・定家父子による表紙への書入れであることを誰にでもわかるように、明らかにしたのである。反響は大きく、書誌学を専門とする研究者からも「目から鱗だ」「一目で理解できた」と感想が寄せられた。研究成果の発信ツールとしての動画配信の威力も与って、複製古典籍を使うことの、わかりやすさ、＜モノ＞としての有効性を広く知らしめる好機となった。

（6）新型コロナの影響などにより実現に至らなかった事例報告

当該研究課題は 2018 年 4 月～2021 年 3 月までの 3 ヵ年計画でスタートし、延長に延長を重ね、2024 年 3 月までの 6 年間に及んだ。

この間、新型コロナは当該研究の 2019 年暮れ頃から徐々に顕在化し、2020 年 3 月にはパンデミックとなり、同年 4/7 から 2022 年 3/2 の 2 年間、緊急事態宣言（4 回）まん延防止重点措置（2 回）が発出された。5 類に移行となったのは 2023 年 5/8、つい最近のことである。

2019 年 2 月にジャポニズム研究の世界的権威、ロンドン芸術大学名誉教授のトシオ・ワタナベ博士が来日された。博士は、分担者（彬子女王殿下）のオックスフォード大学大学院時代の博論指導教授である。分担者に伴われて、代表者も宿泊先のホテルに伺い、面談の機会を得た。富士ゼロックス京都ＣＳＲグループ文化推進室（当時）の協力を得て、同室製作の複製古文書・古典籍の優品（南方熊楠の大英博物館ノートなど）を持参し、複製物の活用と世界発信に向けた貴重なアドバイスも頂戴した。また別なルートからは、海外では専門研究者でも手袋をしないと古典籍に触れられない、と耳にした。英国、そして日本の古典籍研究が盛んなハワイ大学やなどで、複製古典籍を持ち込んでのワークショップの計画などが夢想された。遠慮無く触って日本の書物に触れる機会が作れたら、海外でも和本への理解が深まることだろう。もとより国内においても、子どもたちに自由に複製古典籍を触ってもらい、日本の書物の多様性を体感し理解してもらう機会を作りたいと考えていたが、コロナで対面は無理、コロナが落ち着いたすき間を狙っても、不特定多数が集まり、さらに複製物に多数の手が触れること自体が敬遠された。

このほか、周到に準備を重ねながら実施当日のサプライズにより、実現できなかった計画もある。和食文化学会が設立され、和食文化を世界に向けて発信するため、2019 年 2 月に第 1 回の大会が、京都府・京都学歴彩館にて開催された。その折に、学会立ち上げに参画し理事でもあった代表者の企画・発案で、室町時代から続く京都の老舗料亭所蔵の、貴重な料理関係の極彩色絵巻の複製古典籍を展示することが決定した。料亭には富士ゼロックス文化推進室長（当時）と原本照合のための実地調査にも赴いた。学会事務局との間で展示品も選定し、会場へ複製品を搬入し並べる直前に、老舗料亭からサプライズのご好意で原本が持ち込まれ、急遽、複製品を原本にさし替えて展示が行われた。もとより原本に優るものはないが、複製古文書・古典籍の利用と発信をテーマに、会場の反応や複製物に対するアンケートなども可能であっただけに、我々の準備は水泡に帰した点が、幾重にも惜しまれる。

〔付記〕　当該研究を遂行するにあたり、（株）富士フイルムビジネスイノベーションジャパン京都支社ＭＳ部文化推進京都工房の関係各位には研究立案の段階から協力をいただいた。記して深甚の謝意を表する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計24件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 小林一彦	４．巻 3
２．論文標題 伝烏丸光広筆「方丈記」の出現―嵯峨本の周辺―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 京都学問所紀要	６．最初と最後の頁 71-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小林一彦	４．巻 159
２．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（三十五）阿仏尼（上）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 しくれてい	６．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小林一彦	４．巻 160
２．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（三十六）阿仏尼（下）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 しくれてい	６．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小林一彦	４．巻 155
２．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（三十一）　摂津	５．発行年 2021年
３．雑誌名 しくれてい	６．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 156
2．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（三十二）二条太皇太后宮大弐	5．発行年 2021年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 157
2．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（三十三）　六条院宣旨	5．発行年 2021年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 158
2．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（三十四）　後嵯峨院大納言典侍	5．発行年 2021年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 26
2．論文標題 真観本「寿永百首家集」―私家集研究の大河の中で―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 京都産業大学日本文化研究所紀要	6．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 彬子女王	4．巻 -
2．論文標題 大英博物館に所蔵された法隆寺一金堂壁画と百済観音の複製の意義についてー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 特別展　法隆寺金堂壁画と百済観音図録	6．最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 151
2．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（二十七）　小馬命婦	5．発行年 2020年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 152
2．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（二十八）　小大君	5．発行年 2020年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 153
2．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（二十九）　四条宮下野	5．発行年 2020年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 154
2．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（三十）　肥後	5．発行年 2020年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 16
2．論文標題 為家の悲しみ	5．発行年 2020年
3．雑誌名 古典文学研究ジャーナル	6．最初と最後の頁 106-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 148
2．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（二十四）　斎宮女御（上）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 149
2．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（二十五）　斎宮女御（下）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 150
2．論文標題 王朝の女流歌人たち　御文庫の典籍から（二十六）　選子内親王	5．発行年 2019年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 彬子女王	4．巻 24
2．論文標題 女性皇族の衣装の変移について―明治の洋装化がもたらしたもの―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 京都産業大学日本文化研究所紀要	6．最初と最後の頁 456(9)-430(35)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 24
2．論文標題 後桜町天皇の明和四年和歌三神御法楽五十首宸翰短冊―玉津嶋社・柿本社奉納短冊をめぐって―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 京都産業大学日本文化研究所紀要	6．最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 -
2．論文標題 デジタル世代に和本のアナログ文化を伝える	5．発行年 2019年
3．雑誌名 研究報告「初中等学校における古典教育」	6．最初と最後の頁 72-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 144
2．論文標題 王朝の女流歌人たち―御文庫の典籍から（二十）　平親清四女	5．発行年 2018年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 145
2．論文標題 王朝の女流歌人たち―御文庫の典籍から（二十一）　平親清五女	5．発行年 2018年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 146
2．論文標題 王朝の女流歌人たち―御文庫の典籍から（二十二）　御形宣旨	5．発行年 2018年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一彦	4．巻 147
2．論文標題 王朝の女流歌人たち―御文庫の典籍から（二十三）　本院侍従	5．発行年 2018年
3．雑誌名 しくれてい	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　6件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 （パネリスト）彬子女王　クリストフ・マルケ　小林一彦　村田純一／（コーディネーター）山本荘太
2．発表標題 古典　それは未来への遺産
3．学会等名 古典の日宣言15周年記念パネルトーク（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 小林一彦
2．発表標題 豪華本「伝烏丸光広筆『方丈記』」（巻子本一軸、下鴨神社蔵）の出現から―角倉素庵の出版活動と光悦・宗達ら慶長期のデザイン―
3．学会等名 京都産業大学日本文化研究所月例研究会
4．発表年 2023年

1．発表者名 小林一彦
2．発表標題 後桜町天皇と近衛内前―女帝の和歌とまつりごと―
3．学会等名 第14回陽明文庫講座（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 彬子女王
2．発表標題 皇室文化と伝統技術の継承
3．学会等名 からむし織体験生30周年記念シンポジウム（招待講演）
4．発表年 2023年

１．発表者名 彬子女王
２．発表標題 大英博物館と日本美術
３．学会等名 旭川日英協会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 小林一彦
２．発表標題 ほんの枕を―古典籍の「もてなし」「あひしらひ」から―
３．学会等名 人間文化研究機構国文学研究資料館創立50周年記念式典講演（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 小林一彦
２．発表標題 鴨長明『無名抄』その原態と流布―鎌倉期和歌史のために―
３．学会等名 和歌文学会第140回関西例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 彬子女王
２．発表標題 伝えるもの　伝わるもの―明治から平成をつなぐ皇室文化―
３．学会等名 学習院大学史料館講座「華ひらく皇室文化―明治宮廷を彩る技と美―」（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

1．著者名 三笠宮崇仁親王伝記刊行委員会（刊行委員長彬子女王）	4．発行年 2022年
2．出版社 吉川弘文館	5．総ページ数 1374
3．書名 三笠宮崇仁親王	

1．著者名 彬子女王	4．発行年 2019年
2．出版社 小学館	5．総ページ数 272
3．書名 最後の職人ものがたり	

1．著者名 鶴崎裕雄・小髙道子・深津睦夫･三木雅博･小出英詞･芦田耕一･神道宗紀･吉田豊･廣田浩治･山村規子･大谷俊太･小林一彦･倉橋昌之･西田正宏･綿抜豊昭･	4．発行年 2018年
2．出版社 和泉書院	5．総ページ数 328
3．書名 歌神と古今伝受（小林一彦「後桜町天皇御製「御法楽五十首和歌」（住吉大社蔵）をめぐって」を分担執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	彬子女王 (Princess Akiko of Mikasa) (20571889)	京都産業大学・日本文化研究所・特別教授 (34304)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関